王子動物園の裏側を見てみよう！

2016年2/3月　文・眞鍋

本校がサポーターをしている王子動物園のサポーターズデイに行ってきました。まず最初に園長のご挨拶。開園から６５周年を迎える王子動物園ですが、イルカ問題などに象徴される動物の入手のむずかしさ、老朽化が問題でサイ舎を復活させたいが、神戸市の予算枠の配分が難しく…、人材の育成も困難で（動物によっては10年でやっと一人前の飼育係になるものもある）とこの近辺では一番にぎわっている動物園でも難しいことがたくさんあるんだなと感じました。

サポーター制度を作って今年で10年ということで12団体が感謝状をもらっていました（もちろん、松蔭中学校・高等学校もね）。そして昨年から今年までニュース。アムール豹の赤ちゃんがおそろしくかわいらしくて、猛獣なのに抱きしめたくなりました。チャップマンシマウマの赤ちゃんはお尻がキュート。レッサーパンダ―の赤ちゃんはとても運動神経が良くお転婆。シロテナガザルの子どももかわいかったです。またマサイキリンのみらいちゃん、ホッキョクグマのアイス、シベリアヤマネコやボブキャット、ゴリラの雄雌が亡くなった報告がされました。パンダのタンタンが一人きりなのでまた繁殖をめざして中国と交渉するそうです。「Zoo一っと一緒におりタイガー」などという変な曲がかかっているなあと思ったら（ごめんなさい）、できたての王子動物園のテーマソングだそうです。このごろおとな旅・神戸、夜桜通り抜け、大人のための動物園講座、サマースクール、トワイライトZOOなどいろいろなイベントも企画して盛り上げていくようです。

さてお目当ての園内ガイドツアー。私はアシカ舎でアジ2匹をアシカにやり（カイトって若いオスのアシカが若いメスにあげた餌をかっさらっていって憤慨）、ホッキョクグマ舎で白熊を横目に雪を作る機械をくぐって、檻の中でバケツにはいった餌（白菜やブドウ）を持ち、ガス管のおもちゃをさわってみました。重かった。クマはすごい力持ち！それから調理場でいろいろな動物の餌を見せてもらいました。マイナス22度の冷凍庫にはびっくりしました（思わず「ラストニア、私の国。冬将軍の治めるこの国」と台詞を言いたくなりました）。ペレットもありましたが生きている虫やドジョウ、ネズミなども餌になっていました。お土産に桜の木のコースター（王子動物園の焼き印が入っているもの）と、パンダのはがき、動物のカードとフォルダをいただきました。おばあさんのアシカの泳ぎが優雅できれいでした。解説してもらわないとわからないことはあるし、詳しくわかると面白くなってきます。また来年、来たいと思いました。帰り、資料室（ビデオブースやこども資料室もある）に寄りたかったけど時間がなかったのでまた今度。動物好きにはたまらないイベントです。ぜひ来年は生徒4組8人参加してほしいと思いました（今年は英検の2次試験の日と重なって残念でした）。

さて、今月紹介する本は 『首切りの歴史』 フランシス・ラーソン　河出書房新社　2015

クロムウェルの首を得意げに客に披露する男の話から始まるこの本は、太平洋戦争時にアメリカ兵に日本兵の頭蓋骨が収集されてインテリア扱いされていたことや、首狩り族の干し首を集めるために「文明国」の人間が首を作らせて収集していたこと（そこには人種差別がある）、ギロチンがいかにすぐれた死刑制度だったか、首切りがどれほど熟練の必要な仕事だったかなど、首というものがどれほど残虐でありながらも魅了される身体の部位でもあることを示している。『ベルサイユのばら』でアントワネットに苦々しい宮廷デビューをさせたデュ・バリー夫人がギロチンの前で情けなく取り乱したことや、ルイ16世、アントワネットやロベスピエールの首を迅速に蠟細工にして見世物としてイギリスで興行して大当たりしたマダム・タッソーの話、イスラム系武装集団がタリバン兵の解放を要求してかなえられなければアメリカ人記者の首をはね、インターネットで公開したこと、ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルトなどの人気作曲家は死後首を盗まれたことなど、首にまつわるさまざまなことがわかる。

あやしげな骨相学（頭骨の形状から、その人の性格その他の心的特性を推定できるという考え。）は、頭蓋骨は人種間の違いよりも個人差の方が大きいという結論で片づけられている。

小学生のころ、首を挿げ替えていきているSFを読んだが、自分の脳を冷凍保存して、新しい身体が用意できるまでずっと維持されている団体が現実にある。犬やサルで首を移植して、数週間生きた例もあるが、人間は心臓移植でも問題が大きいのに、難しいだろうと脳移植の話。

そういえばシャーロックも部屋に頭蓋骨を置いていたっけ。『忌まわしい花嫁』では洗練されただまし絵になっていたけれど。20年ちかく前に科学博物館の司書をしていたとき、やはり大量の頭蓋骨を見た。（こわくてさわれなかった）「100年以上まえのものなら歴史的資料だよ。それ以内なら犯罪事件になるけど」と聞いたのを思い出す。どうしてこの首の本を読もうと思ったかというと「ウルフ・ホール」という海外ドラマ。陰気で地味なトマス・クロムウェルが恩あるウルジー卿を失意の死に追い込んだ人間に復讐する物語。「天罰を祈りました」という お付きのものに「**そんなことで神を煩わせるな。私に任せておけ**」といったセリフが力強く魅了された。周囲を傷つけ、法秩序をすべて曲げてまで結婚したアン・ブーリンを気に入らなくなったら斬首刑に処したヘンリー8世の身勝手に驚く。そしてお気に入りだったクロムウェルもまた、復讐をとげたあと、失脚し首をはねられる。ヘンリー８世はわざと新人の首切り役人にやらせて苦しみを味あわせたのだとか。（このクロムウェルは見せびらかされていた首のクロムウェルの先祖）首をはねられるのは聖人か罪人、あと貧しい人や先住民族という、珍しいケースのひとばかりだとこの本の説明。が、人種差別されたりして、ものだと思われたら私だって簡単に首をはねられる。第二次世界大戦でドイツやイタリア人の首がはねられてインテリアになった例など聞かない。人間だもの、死ぬ前も死んだ後もモノ扱いにはなりたくないものですね。